

助けたい 梓超えつなぐ

子ども貧困 学校で ④

学校が始まって、小3の男児は家の玄関先でうずくまっていた。

「お母さんが仕事で夜中まで帰ってこない。不安で寝られへん」。家と連絡が取れず訪ねてきた男性教諭に言った。母親は部屋で寝ているという。「行」。保健室で休んでええから」。男性教諭は手を差し伸べた。男児は母親の離婚を機に前年末、転入してきた。母親はハローワークで職が見つからず、スナックで週6日働き、未明に帰宅。男児はしばしば欠席した。

母を雇の仕事に

2013年6月。関西の

この小学校に通い、女性スクールソーシャルワーカー(SSW)が来る日だった。夕方、子どもの支援を検討する「ケース会議」で、SSWは男児の母親に生活保護を受けさせ、雇の仕事に変えてもらうよう提案。母親の信頼が厚い男性教諭を説得役に据えた。

家を訪ねた男性教諭に、母親は「子どもに寂しい思いをさせているのはわかってます。でも中卒で資格もない私にはこの仕事しかない」と泣いた。生活保護は「市役所に行つたけどダメでした」と首を振った。翌週のケース会議。SSWは「現状を窓口でうまく説明できないのでは。児童福祉課に頼みましょう」と、窓口に行つてもらおうよう提案した。夜に子どもだけ長時間過ごす状態は虐待に当たり、行政が動く案件と考えた。その年の秋に

保護決定が出た。家計に余裕が生まれ、母親は負担の軽い雇の仕事に就いた。いま母親は、玄関から子どもの登校を見送る。「きょう体育ありますか?」。今月、母親から学校に電話があった。登校後に家で体操服を見つけ、心配になったという。

家庭の抱える問題から子どもを救うには、学校を軸に専門機関や支援団体といかにつながるかがカギだ。「うちがあかんわ」。12年秋、関西の小6の少年は始業時刻を過ぎても登校せず、迎えに来た女性教諭に告白した。同じころ、中3の姉も信頼する男性教諭に「高校行かれへんかも」と漏らした。

数日後、小学校の校長室で校長、小中の教諭、市の児童福祉担当者が父親を

招きケース会議を開いた。父親は糖尿病が悪化し、仕事ができず収入が激減。医者から入院するよう強く言

われていた。この地域では学校の枠を超えて行政、支援団体が絡み合いで問題解決を図る仕組みがある。子どもだけでなく、窮状の根っこにある家族を支える。ケース会議は両校を担当するSSW、社会福祉協議会も加わり回を重ねた。社

協は食料品や医薬品を緊急支援、SSWは一家の生活保護要給に奔走、学校は進学を控える姉弟の制服を卒業生から調達した。13年夏、生活保護決定。父親は入退院を繰り返しつづも、家計は安定した。いま中3の少年は、NP

0の無償の学習支援を受けて高校受験に挑む。高3の姉は今春、住み込みの仕事に就く。困窮を極めた4年前、父親はSOSを発する気になれなかった。「こっちの事情やから。気づいてくれて、ほんま助かった」(丑田滋、宮崎亮)おわり

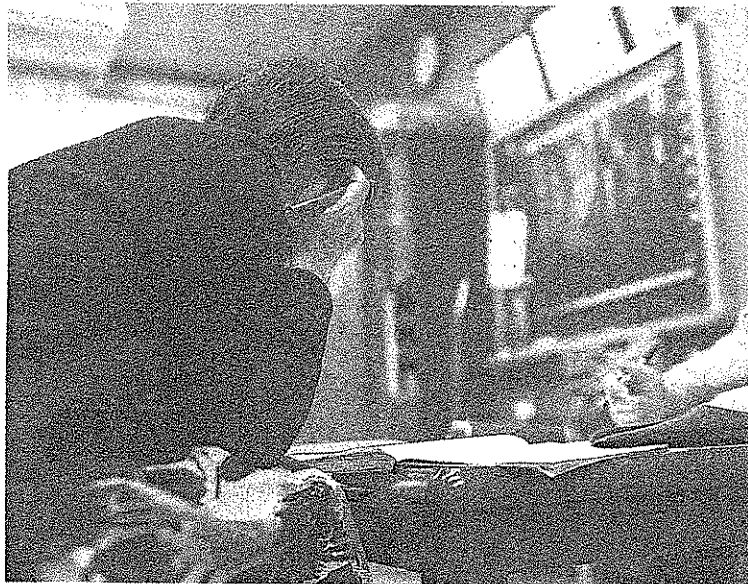
家計安定させる

「うちがあかんわ」。12年秋、関西の小6の少年は始業時刻を過ぎても登校せず、迎えに来た女性教諭に告白した。同じころ、中3の姉も信頼する男性教諭に「高校行かれへんかも」と漏らした。

子ども支援の専門家

日本学校ソーシャルワーク学会副代表の高良麻子・東京学芸大学教授は「家庭環境に起因する多様な問題が増え、教職員では対応できなくなっている」と話す。SSWの多くは問題が起こってから派遣される形態をとる。「学校や地域との関係が築きにくく、有効な支援が難しい。日常的に学校に入れば予防・早期対応も可能になる」と、運用の見直しを求める。

担当教諭から報告を受け、対応を考えるスクールソーシャルワーカー(内田光撮影)



スクールソーシャルワーカー(SSW)は原則として社会福祉士や精神保健福祉士の資格を持ち、不登校や虐待など子どもや家庭が抱える問題の解決に向けて支援する専門家だ。文部科学省は2008年度からSSWの配置を始め、今年度予算には2247人分を計上した。政府が昨年12月にまとめた子どもの貧困解消や児童虐待防止への政策パッケージでは、19年度までに全中学校区、約1万人の配置をめざ



子どもと貧困について、ご意見をお寄せください。メール(asahi_forum@asahi.com)か、〒104・8011(所在地不要)朝日新聞オピニオン編集部「子どもと貧困」係へ。